

（開催報告）

『図書新聞』と人文学の現在

——公器としての書評紙を考える

ゲスト： 須藤 巧 氏（『図書新聞』編集長）

70 年以上にわたり書評や映画評、美術批評、社会批評を提供してきた『図書新聞』（1949 年創刊）が、2026 年 3 月 31 日に終刊を予定している。たんに「本の紹介」をするにとどまらず、言論をたたかわせるプラットフォームとしての機能も有する場が失われるという事態を前に、書評紙という場の意義や価値、書評の社会的な機能について考える機会を持ちたいと思い、本企画を計画した。『図書新聞』の「創刊のことば」（1949 年 6 月 25 日号）では、同紙の使命を「著わす人、読む人、届ける人、広める人が相集い、互いに言いたいことを論じられるよう、そのメッセンジャーとなるべきもの」としていた。これをそのまま形にしてみたいと考えたのである。

本研究科の少なからぬ教員も同紙に寄稿してきたことと思うし、何より、折に触れて書評から人文学の最先端の知見を得てきたはずである。そうした機会や場が消えてゆくことは、媒体が1つなくなるということ以上の意味を持ってはいないだろうか。出版の環境や出版物の形態の変化は、学問そのものにも少なからぬ影響を与えるはずである。

今回、人文研究センターでは『図書新聞』編集長の須藤巧氏をお招きし、『図書新聞』や出版流通をめぐる現状や、今日に至るまでのことなどを伺いつつ、人文学や出版文化圏の現在について参加者も交えた討議を行った。2026 年 1 月 26 日（月）の、18 時から 20 時までという短い時間、もっと続きを……と思える時間だった。教員、大学院生を交えて盛んに質疑、意見が交わされた。

須藤氏は大学生だった 20 歳の時から『図書新聞』の編集に携わってこられた。初めて書評を依頼し（本の選定は当時の『図書新聞』代表・井出彰氏だったという）、許諾を得たエピソードを披露された氏から、編集の喜びを教えられた思いだ。

本企画では出版に関心のある学生・院生も参加することが期待されたため、書評対象本の選定方法とか、執筆候補者の探し方など、編集のルーティンについても事前に解説をお願いしていた。学生・院生向けにとは思ったが、私自身も初めて知ることも多く、学ばせていただいた。（2025 年度に開始した人文研究センターのポッドキャスト「立教人文学ラジオ」で当日の音声を公開する予定なので、そちらで詳細をお聴きください。（2026.1.27 記））

「立教人文学ラジオ」

<https://open.spotify.com/show/1lvPwCWQBSjxhk1KCGUeDq?si=c40327df5a7d4e74>

他にも、雑誌メディアの衰微による出版物の全国的な流通の縮小、電子書籍等出版物の形態の変化とその市場への影響、文学フリマに象徴される近年の同人誌文化に対する見解、いわゆる「ひとり出版社」の活動など、話題は多岐にわたった。

あらためて、この度の終刊をめぐって、須藤氏には「身を切られる思い」というのが比喩にならないほどの苦しさ、辛さがあることと思う。相当な尽力を重ねても、このような状況になったという。「紙」という形態へのこだわりに対しては、参加者から「紙に権威を見出しているのではないか」といったような意見も出た。その際に、須藤氏は確かにフェティッシュではある、と言われたが、それに頷きながら少し異なることも考えていた。たとえば、紙の辞書で外国語を勉強した世代の私は、周囲が電子辞書を使い始めた時に、上手く適応できなかった。なにか強烈な違和感を覚えたからだが、その理由は、一問一答的で、一度に目に入る情報が少なすぎることにあった。紙の本を開き、目に入った言葉の内容を理解するだけが「読むこと」ではなく、むしろそれらの言葉の配置など、複雑で豊饒なメタメッセージを私たちは受け取っている。その次に、読者各自が受け取ったものを頭の中にある地図に加筆したり、あるいは忘れたり、捨て去ったりする。そうして知は蓄積するのではないか。

やはり新聞という形態そのものがモノとして「場」を構成していて、記事の並び順、書影の見せ方、見出しといった複数の要素を一覧に供してくれる。そうしたモノを前に、読者はさまざまなメッセージを受け取り、そして初めてそこに書かれている内容を吟味し、価値付け、理解する。あるいは、自身が「場」に参入する。「考えはじめる」という形で。そうした運動を可能にしてくれる「場」には、他にどのようなモノがあるだろうか。『図書新聞』という「場」の代わりになるものは、今後出てくるだろうか。

尾崎 名津子(人文研究センター委員／日本文学専攻准教授)